

2021年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として1998年4月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とします。

書類提出期間: 2021年4月1日(木) ~ 2021年4月30日(金) まで

書類提出先: ジェンダーフォーラム (gender@rikkyo.ac.jp) に添付ファイルにて提出

採用発表: 5月17日(月) 学生課奨学金掲示板(池袋/新座)、10号館通路掲示板、立教時間、フォーラムHPに掲示予定

授与式: 5月下旬(予定)

(B) 活動・研究助成金

対象: 学部学生・大学院生(個人・団体)	面接日時: 未定。決まり次第、ホームページにて告知する。個々の面接時間はあらかじめ連絡する。
支給額: 総額20万円	面接会場: ZOOMミーティングにて実施
採用件数: 1~2件	備考: 採用者(団体)は活動・研究の中間報告を10月末に提出の上、最終的な報告書または論文を翌年1月中旬に提出すること。提出された活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。
選考方法: 書類審査・面接	
提出書類: ①活動・研究助成金願書* ②奨学金使途を含む活動・研究計画書(A4用紙3枚程度書式自由)	

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】

標記の申込書(願書)で取得した個人情報、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。

以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「立教大学プライバシーポリシー:個人情報取扱に関する基本方針」(<http://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/>)を参照すること。

※(A)ジェンダーフォーラム論文賞の募集は10月に行います。詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス6号館1階) Tel:03-3985-2307 E-mail:gender@rikkyo.ac.jp

*申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生課窓口(池袋/新座)、独立研究科事務室窓口にあります。ホームページ上からもダウンロードできます。(<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>)

立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」とらわれず、性差やセクシュアリティ(性自認・性的指向など)についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー(gender)とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女/男らしさ」「女/男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館(1998年閉館)の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒアワーなどを開催しています。

開室日: 毎週月曜日~金曜日

開室時間: 10:00~16:00

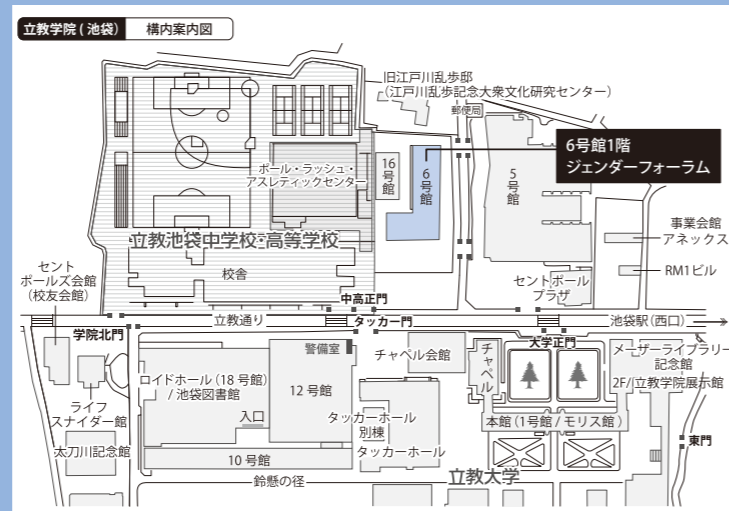
※新型コロナウイルス対策のため、一時的に開室日時を変更する可能性があります。詳しくはホームページをご確認ください。

場所: 立教大学池袋キャンパス6号館1階

TEL&FAX: 03-3985-2307

E-mail: gender@rikkyo.ac.jp

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>

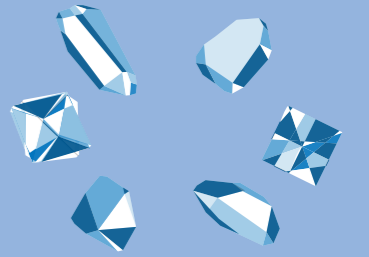


詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPをご覧ください。

GEM

Vol.44 2021.3.31

Rikkyo Gender Forum News Letter



Gender Forum
Rikkyo University



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館(1998年閉館)の“M”にちなんだものでした(Gender Encountering in Mitchell)。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味するGender Equality in the Makingとし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

2020年度公開講演会(2020年9月17日(木))

「フェミニズムが変えたこと、変えられなかったこと、そしてこれから変えること」を通して学んだこと

登壇者: 小川たまか氏(ライター)、酒井順子氏(エッセイスト)、田中美津氏(鍼灸師)、佐藤文香氏(一橋大学大学院社会学研究科教授)、上野千鶴子氏(東京大学名誉教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)理事長)

2020年9月17日 オンラインにて、600名程の参加者と共に3時間に亘る熱気のある講演会を視聴する機会を戴いたことは、私にとって大きな喜びとなった。日本のジェンダーギャップ指数は、世界153か国中121位(2019年)と低迷し、男女平等はいまだに道半ばである。その中での本講演会は、NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)との共催で、女性たちがこれまで切り開いてきた達成の振り返り、残された課題と、これからのフェミニズムが社会にどのように関わっていくのか、これからの10年を考えるとという狙いがあった。

登壇者は、上野千鶴子氏をはじめ、田中美津氏、酒井順子氏、小川たまか氏、佐藤文香氏という錚々たる方々。又、予てから立教大学には、萩原なつ子21世紀社会デザイン研究科委員長、長有紀枝副学長をはじめ、ジェンダー・人間の安全保障の問題において先駆者として活躍された先生方が教授されている。一人一人の声で社会は変えられる。おかしいことはおかしいと発信できる立場にいる女性としてメッセージを出し、後進たちに繋げていくことが我々一人一人の役目なのだと伝播している。

「自分たちに何ができるのか」「今をいかに生きるか」を考えて、一歩前へ出ることが喫緊の課題である。近年「#Me Too」や、「沈黙は賛同」など一人一人の声を上げることの必然性や勇気ある発言・行動によって社会を変えられるというフェミニズムが高まっている。

ジェンダーの問題に関しては、広範囲においてSDGsに繋がっていると視座する。達成目標年2030年に向けた教育の意義は、地球環境の限界マエネルギー資源の有限マ科学技術やイノベーションの必要性マ社会貢献への意識などを学べるとし、生まれ持った権利を享受できないほどの「あらゆる形態の貧困撲滅」や、社会的格差の改善や弱者への配慮で「誰一人取り残さない」ことを強調しているが、これは正にジェンダーの問題に範を垂れるものだ。

今こそ社会に対して声を上げることが必要なのだ。私自身も医学部不正入試については、実娘の受験の経緯から念いを抱いた一人である。この問題については、立教大学の授業を通して改めて気付きがあり、発表する機会も戴いた。立教大学には、社会問題を私事でとらえ問題定義のできる土壤がある。そして、それが社会デザインで学ぶ意義を齎している。

私は、昨年3月末に高校教員を退職して、4月から本学大学院の学生として学んでいる。私心ではあるが、立教大学院の良さは、「社会デザインに対峙した革新的な教育と進化し続ける学びの深さ」にあると言明できる。幅広い視点を身に付けられる豊かな学びが立教大学には存在する。何より立教大学院で学ぶ一人として、日々「わくわく感」を覚えている。

今後も立教大学で「精神性の高い学び」を求め続け、身に付けていくことを切望している。

原 恵三子(本学大学院21世紀社会デザイン研究科博士前期課程1年)

ACTION REPORT

第 80 回ジェンダーセッション (2020 年 10 月 23 日 (金))

「ドイツとオーストリアにおけるジェンダー研究」

登壇者：ジャスミン・ルカト氏 (デュッセルドルフ大学助教)

フェミスト神学の泰斗 E・S・フィオレンツァは、1970 年にミュンスター大学から新約聖書学の博士号を取得したが、女性であるがゆえにドイツで神学教授のポジションに就くことはできず、アメリカに移住しなければならなかったという。この逸話を知っていたため、ルカト先生がドイツとオーストリアのジェンダー研究の事情について、どんな話をされるのか興味を持って参加した。

ルカト先生によれば、ドイツとオーストリアの女性運動は 60 年代、70 年代の学生運動と同時的に起こったという。女子学生たちは男子学生が家父長意識を持っていることを批判し、学内に女性スペースを作って、会議や、ゼミ、コンサートなどを開催し、学内外の女性の支持を得た。旧西ドイツとオーストリアの場合、当時高等教育現場での女性の割合は、学生で 25%、教員は 2% で、全くもって男性中心の環境だったと言える。この女性運動の結果、1976 年にベルリンで「女性の夏期大学 (Summer University)」が 1 週間開かれることになった。数千人の参加者を得て、「女性と学問」というテーマの下、熱い議論が繰り広げられたが、後に代表的女性史研究者となるジゼラ・ボックは、「私たちは社会を『根本的に』変えたいのだ」と発言した。これが女性文化研究センターや女性文化資料館などに発展して行くことになった。

ACTION REPORT

第 81 回ジェンダーセッション (2020 年 11 月 23 日 (月))

「出産後の就労継続をめぐる戦後女性教員史 ——育児休業要求運動と保育所設置運動を事例として」

登壇者：跡部千慧氏 (本学コミュニティ福祉学部助教)

私がこのセッションに興味をもった理由は二つある。一つは、教員をしていた 1981 年と 84 年に、私自身が育児休業のお世話になったこと。「育休がとれるのは先輩たちの運動のおかげ」とは思っていたものの、具体的な運動の内容はまったく知らなかった。

もう一つの理由は、元教員だった年上の友人の存在である。友人のライフヒストリー (佐野明子「女性教師として四〇年を生きて／栗田富貴代」静岡女性史研究会『しずおかの女たち 第八集』2014 年) によれば、1928 (昭和 3) 年生まれ彼女は、48 年に現在の静岡市で小学校の教員となり、1956 年に長男、59 年に長女を出産した。同居していた義母に子どもを預け、家事のいっさいを義母と義姉に任せて働き続けることができたという。一方で、当時は、「産まれた赤ん坊を行李 (こり)・竹や柳で編んだ箱」等に入れて教室に連れてきた女教師もいた」そうだ。育児休業制度がない時代の女性教員の苦労を物語るエピソードである。

さて、ZOOM ウェビナーで行われた今回のセッションは、講師からチャット機能で参加者にたびたび質問が投げかけられ、また参加者からも活発な書き込みがあり、あたかも同じ空間で語りあっているような温かい雰囲気の中で進められた。

跡部氏はまず、1960 年代の日本では、中高卒女性の「雇用労

働化」と高学歴女性の「主婦化」が進んだが、そうした中でも高学歴で就労を継続したのが女性教員だったという。しかし、核家族化が進む中で出産後も働き続けるためには、子どもの預け先を確保するか、復帰が約束された休業制度を確立する必要があった。

そこで 1963 年、日本教職員組合 (日教組) の定期大会で育児休業法制定の運動方針化が提起されたが、当初はこれに対する反発や強い懸念が示された。そのため、驚いたことに、1966 年に日教組が運動方針化するまでに 3 年、さらに 67 年の法案の国会提出から 75 年の「女性教員等の育児休業法」の成立までに 8 年を要したのであった。この間の議論をジェンダーに着目しながら丁寧に分析した跡部氏は、「日教組の育児休業法制定運動はあくまでも女性の労働権 (働き続ける権利) の確立をめざしたものであり、「保育所が完備されるまでの橋渡しと考えられていた」と結論づけた。

セッションの後半では男性の育児休業など、育児休業をめぐる今日的課題も活発に議論された。54 人の参加者のうち女性と若者の参加が多く、有意義で楽しい学びの場となった。

鈴木 雅子 (静岡県近代史研究会会員)

また、ドイツの女性研究史においては、社会学の影響を忘れることはできない。第二次世界大戦後、フランクフルト学派の批判理論の下で、女性の戦争責任も問われたのである。これによって、ジェンダー研究は、女性の画一的で本質主義的なジェンダー概念の理解から離脱することができたのだ。加えて、ローカルな差異もある。ドイツ統一前は、旧東ドイツの場合、社会主義下の女性の役割が、旧西ドイツやオーストリアの場合、資本主義批判が研究対象であったが、統一後は両地域の研究者が、民主主義の分析を協働して行った。

ポストモダニズムに伴う学際的研究は、アメリカの研究者の影響を受けて、ジェンダーとセクシュアリティの関係を問う研究が注目を集めることになった。これにはクエア理論や性別二元論批判もあいまって、インターセクショナルリティという概念が取り込まれることになった。インターセクション (=交差点) とは、アイデンティティの交差点であるだけでなく、差別の原因となる社会規範や、権力の力学の交差点でもある。複数の社会的、政治的アイデンティティ (階級、人種、民族、セクシュアリティ、年齢等) が組み合わせられることで起こる権力勾配に対して、複眼的に批判・検証して行こうとするものだ。

また、バックラッシュは常にあることだが、ドイツの場合、言語的差別が問題となった。所謂「総称男性名詞」が女性に使用されるのはおかしい、と「無性形」を推進しようとしたところ、新聞が反ジェンダー研究の世論を掻き立てることになった。ジェンダーフリー・トイレの推進に関しても同様だったという。

ルカト先生は結びとして、ジェンダー研究は非政治的になってはならないという。なぜならジェンダー研究とともに、社会が変えられて行くからである。

我が国でもようやく今、女性差別や LGBTQ の問題が顕在化されて来ている。ドイツとオーストリアの歴史と同じ歩みはできないが、インターセクショナルリティという概念は眼前にある問題と対峙するうえで、我々にも適用できるのではないかと考える。

矢田部千佳子 (本学大学院キリスト教学研究科博士後期課程 2 年)

第 82 回ジェンダーセッション (2020 年 12 月 21 日 (月))

「パフォーマンスを通して考えるカミングアウト ——y/n 『カミングアウトレッスン』上映会＋トーク」

登壇者：y/n (橋本清氏 (演出家・俳優)、山崎健太氏 (批評家・ドラマトゥルク))

小学生の頃クラスでは「プロフィール帳」を記入することが流行っていた。名前の通り、生年月日や好きな食べ物など自分のプロフィールを記入して友人同士で交換するものだ。私は今も自分の情報を他者に伝えることが好きだ。私は 1998 年 5 月 19 日生まれ、好きな食べ物は馬刺し、自分のことを男性でも女性でもないと思っている、恋愛対象は性別を問わない、(戸籍上の) 同性と交際した経験がある。

12 月 21 日にオンラインで開催されたジェンダーセッションでは、橋本清氏・山崎健太氏が登壇し、両氏によるレクチャー・パフォーマンス『カミングアウトレッスン』の記録映像が上映された後、チャット機能を利用し、鑑賞者からの質問を通して両氏による同作品の解説が行われた。

『カミングアウトレッスン』で特に印象的だったのは、先に語られる言語がパフォーマンスの途中で切り替わる点である。前半は橋本氏が日本語でゲイとしてのカミングアウトに関する経験を語った後、同じ内容を山崎氏が英語で語る。後半では橋本氏と山崎氏の語る順番が入れ替わり、山崎氏が英語で語った後、同じ内容を橋本氏が日本語で語る。前半 / 後半の切り替えによって山崎氏が橋本氏の発言をただ英訳していたわけではないことが明らかになったため、

観客である私は橋本氏 / 山崎氏のどちらが本当の語り手=ゲイなのかを見極めようとした後、そもそもこれはパフォーマンスであって橋本氏 / 山崎氏自身の語りとは限らないことに気付いてはつの悪さをおぼえた。こうした前半 / 後半の切り替えは日本語 / 英語という二項対立だけでなく、カミングアウトを「する側」/ 「される側」の二項対立をも揺らがせる。

「する側」/ 「される側」には、聞いてもらう / 聞いてあげるという関係だけではなく、相手の反応を受け取る / 反応を示すという関係が成り立つ。私がカミングアウトすると、多くの場合、相手は困惑して正しい反応を探そうとする (冒頭のカミングアウトを読んで、あなたはどう感じただろうか? ちなみに、生年月日や好きな食べ物と同列にセクシュアリティが語られたことに違和感を感じただろうか? それはなぜか?)。「される側」は自身の反応を「する側」や「される側」自身によってジャッジされることから逃れられず、それまで秘密にしていた、セクシュアル・マイノリティに対する態度を明らかにするという点で「する側」だと言える。誰でも「する側」「される側」であるため、『カミングアウトレッスン』は全ての人にとって有効であると考えられる。

畠山波那 (本学社会学部社会学科 4 年)